

青年の樹(一)

石原慎太郎

青年の樹 (一)

石原 慎太郎

角川書店

昭和34年12月25日 初版発行  
昭和36年10月10日 九版発行

青年の樹 一定価 三一〇円

著者 石原慎太郎

発行者

角川源義

印刷者

中内あき子

製本者

鈴木俊一

著者の  
申し合  
わ  
せによ  
り  
検印  
廃止

発行所

株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見町二  
振替 東京一九五二〇八番

中光印刷株式会社 鈴木製本所  
落丁・乱丁本はお取替え致します

青年の樹  
(一)

装  
幀  
伊  
藤  
明

電車の中には新しい詰襟が沢山見られた。方々で入学式があるのか、両親らしいつき添いと連れだった若い学生の姿が何人も見られる。

彼らの様子はなんとなくこちなく、その詰襟はきゆうくつそうで、やっと一人歩き出来るようになったくらいようすの鳥を連想させた。その内の何人かは武馬と同じ丸い銀杏のバッジを襟につけている。

電車の震動にゆられ半ば黙然しながら、達之助は実に満足そうだった。武馬はこんな表情の父を久し振りに見た。

駅毎に新しい学生服が出入りする度、それを一人一人見送りながら達之助はしきりに、「ふむ、ふむ」と頷く。

蒲田でまた一人、武馬と同じ襟章が乗り込んで奥に入ると、達之助は促すように武馬を見返り、にやりと笑う。が、すぐに、微笑い返す武馬をことさら庄えつけるよう、

「まだ一人前じゃない」  
うそよ  
囁くようにまた言った。

それは達之助の口癖だ。言われる度、半分くらいはかっともなるが、その時は武馬はただ黙って笑った。

入試合格の通知電報が来た時も、手を取り合って喜ぶ武馬と母の悠子（ゆうこ）を叱りつけ妙に悠々と電報を読み直し、その癖自ら久し振りに神棚（しんとう）へ燈明（とうめい）を上げたりしたが、その後で、

「まだ一人前じゃない」と矢つ張り言った。

あの時は悠子が達之助に向つて抗（あらが）うようにして息子（こ）を讃（ほ）めた。

「一年浪人したんだ、半分は当り前だ」

達之助は言った。

「お父さんは片輪（かたわ）よ。お前（まへ）が利口（りこう）でなかったらきつとひねくれた子（こ）に育てている」

悠子が珍しく言い返すと、

「馬鹿（ばか）を言え、俺（おれ）は武馬（ぶま）を信用（しんよう）している。がとにかく目（め）でたい。がまだ一人前（ひとまへ）じゃない」

達之助はまた言った。

とにかくそれが武馬（ぶま）を育てる彼（かれ）の方法（はうほう）だったことは間違（まちが）いない。彼は今まで殆（たいてい）ど父（ちち）に讃（ほ）められたことがない。陰險（いんけん）に叱（な）られたこともなかった。何をやっていても、達之助（だしすけ）は黙（もく）ってそれを見てい、かんじんなどころへ来（き）ると叱（な）咤（た）した。

武馬（ぶま）が何かをやつてのけるとか成功（せいこう）したりしても、一度（いちど）は感心（かんしん）してそれを認（う）めて見（み）せてもすぐに、「まだまだ」と言った。

中学校（ちゅうがっこう）の三年（さん）に、彼（かれ）が幅跳（はんどび）で全国競技大（ぜんこくけいぎだい）で記録（きこく）を破（やぶ）って優勝（ゆうしょう）した時も同じ（おな）じだった。だがその時は武馬（ぶま）が言い返（かへ）した。最終回（さいしゅうかい）の跳躍（しやうやく）の時助走（しすう）にうつった瞬間（しゆんかん）、武馬（ぶま）はどうやって入り込んだかフィールド（フィールド）の審査委員（しんさくわい）の後に立（た）っている父（ちち）の姿（すがた）を見た。彼のチャン（chan）スはこの一回（いちど）だった。彼の対抗者（たいかうしや）の

記録は彼の二回目のそれより一センチ長い。しかし武馬には自信があった。

父を見たがそのまま走り、力一杯飛んだ。その瞬間、達之助が裂帛れつぱくの気合と言う奴で、「えいっ」と叫んだ。跳躍の途上の短い一瞬に武馬ははっきりとその声を聞いた。武馬自身より審査員がその声に驚いた。知らぬ者は達之助を悪質の妨害者と見た。

が記録は対抗者を三センチ離れた新記録で武馬は優勝を勝ち得た。

しかし彼には不満があった。達之助の彼の優勝を自分の非常識な声援のお蔭にしたが、武馬は短い跳躍の瞬間ながら、その終り近い部分で父の声のために自分の筋肉が縮んだような気がしてならない。本当に、最後の跳躍の前彼には相手をもう五センチは離す自信があったのだ。

達之助は戦前から戦後にかけて武馬が中学校を卒業する年まで、外国航路の貨物船の船長をやっていた。武馬にとっては幼年の頃から一月二月の長い航海の末にたまに帰って来る父親ではあったが、達之助が彼に見せる親としての表現の強さから、留守ではあってもいつも身近に感じる父だった。

悠子も達之助と比べて尚口数が少なかったが、彼女が達之助の留守中に見せる態度は、本質的には父のそれとどう違ってもいしなかった。それは結局達之助が彼女に知らぬ間にしこんだことだ。一人っ子で、自分ほど甘やかされずに育った人間は先ずいるまい、と武馬は自身でも思う。

小学校にもまだ上らぬ幼年の頃に、父と母と三人で連れだって町を歩きながら、何かで武馬が遅れ追いつこうと駆け出して待ち受ける両親の眼の前で転んだような時、何処かを打つかすりむくかして、腹はら這いのまま両親を見上げて泣きそうになる彼を、「泣くな」と言っただけ達之助は黙って見



守るだけだった。

血の流れた傷に驚いて駈けようとする母を押えて止める父を武馬は子供心にどれだけ憎いと思ったことがあったろうか。

がやがて武馬は決して泣かない子になった。どんな時、どんなに転び、どんな怪我<sup>けが</sup>をしても齒を食いしぼり黙ってむっくり起き上る子供に育った。

悠子はそんな彼を黙って手当てしてくれたし、達之助は短く「良<sup>よ</sup>し」とだけ頷<sup>うなず</sup>くのだ。

小学校六年の夏、丁度<sup>ちょうど</sup>達之助がデンマークから帰っていた時、達之助の使いに出了れた途中で武馬は中学生の不良の四人組につかまって殴られ、応戦して殴り返され袋叩きにされた。喧嘩<sup>けんか</sup>に際しての獐<sup>どう</sup>猛<sup>もう</sup>なる反撃精神も達之助が教え込んだものの一つだった。

挙句<sup>あげく</sup>に溝に突き落され、落ちながら身をかばったはずみに腕をついて彼は左の手首を折った。皮膚の下から飛びだしなかった骨を見て、折れたことは自分でもよくわかった。

痛みはすさまじかった。が武馬はそれを必死に我慢し、父に言いつかっただけの使いをすましにいった。使い先きの主人が顔を見て驚き医者へつれていこうとするのを断り、顔だけ拭かせてもらって帰った。勿論<sup>もちろん</sup>、折れた手は秘<sup>かく</sup>した。

帰って来た武馬を見て悠子が驚き、次いでその手首を見て叫び声を上げた時、

「手が折れた」

とだけ彼は言った。

いきさつを聞きながら達之助は悠子以上に慌て、

「馬鹿な奴だ、こういう時はそのまま帰って来るのだ。放っておいて片輪になったらどうす

る！」

怒鳴るように叱った。

達之助に怒鳴られ、武馬は急に声を上げて泣き出した。こうやって帰って来た末に叱られたのが彼には矢鱈に口惜しかった。泣きわめいて、やけになって飛び出そうとする武馬を悠子が抱きとめ、突っ立っている達之助にこの時だけは叱るように車を呼ばせにやった。

治療を受ける間中、達之助は武馬の右手を握ったまま、ひとことも口をきかずにたち通していた。顔と頭に絆創膏を張られ、添木を当て繃帯で手を釣って帰った武馬が床で睡ると、それまで唇を細く震わしていた達之助はステッキを握ったまま家を出ていった。

町を探し、武馬を傷つけた四人の内、頭目とその次の二人を見つけて捉えると帯にステッキをさし、片手ずつで二人の襟首をつかまえたまま、少年の家までついていった。

ふだつきの頭目の少年は町の博奕打ちの倅だった。達之助は家の玄関でまだ二人の襟首をつかんだままその親を呼んだ。

言う通りに動かず、倅を手から離そうとして近づいた子分を蹴倒した。青ざめた子分に呼び出された親父の前で、二人を敷き据えたまま、

「子供の悪戯がすぎて、他人に大きな怪我をさせるようでは困る。親のあんたが言い聞かして、きかないなら折檻なりしないと、他の多勢が迷惑する。お前さんの手でこの小僧の頬っ面を張り飛

ばしてくれ」

「なにを言いやがる、餓鬼の喧嘩に親が出ようてのか」

博奕打ちは酒を飲んでいた。

「そうじゃあない。親が出たいが、みっともないのがわかっていいるから、同じ親のお前さんにこうやって頼むんだ」

「その喧嘩を親同志で買ってやろうじゃねえか」

周りを促すように見て相手は言った。

「この小僧の折檻は明日でもいい。お前さんは酒を飲んでいる。それとも本気でそう言うのかね」

「本気ならどうした、いいからやっちゃまえ」

動きかかる子分に博奕打ちが言った瞬間、

「馬鹿ものっ！」

つかんでいた襟首を離れたその手が、次の瞬間帯にさしたステッキを抜いて、真向に敷台に突っ立った男の額を殴りつけた。返すその杖が狭い玄関の中で、居合いのように真横の男の首をしたたか払った。ぎゃっというような悲鳴で二人の男が玄関に転げ落ちて氣を失った。

達之助は玄関先きへ飛び出し、ステッキを下げてかまえると、

「来い、手首の代りに貴様ら全部の首の骨を折ってやる」

飛び出した身内の一人が短刀を抜いた時、達之助は鼻で嘲笑った。突込んだ男は刃が懐にとどく

前に、達之助の黒檀こくたんのステッキで頬を張り飛ばされ、前歯を欠いて横にすっ飛んだ。男の落した短刀を達之助は、にやにや笑いながらステッキの先で後に立った仲間の方へ飛ばしてやった。

「次っ！」

の聲に男たちは後退した。

威嚇いかくするように片手でステッキを振って見せながら、

「貴様らのような町の屑くずをみんな片輪にしまつても、警察からは逆に表彰が出るわ」

言ってくるりと後を向き達之助は引き返した。

達之助はそのまま知らぬ顔で家に帰って寝た。が噂うわさはたちまち町で評判になり、悠子は外で話を聞かされ驚いて家へ帰った。

達之助はにやにや笑い、

「武馬には言うなよ」

とだけ言った。

博徒ばくとたちは仕返しをといきまいてという噂があつたが、警察の署長が中に入って手を打った。その席でも、達之助はすっかり上座に坐ったまま、やって来る頭に繃帶を巻いた男たちを鼻の先で笑つたような顔をしていた。

以来近所で達之助のステッキは改めて有名になった。

博徒たちは運が悪かった。達之助には狭い玄関で見たように咄嗟とつさの居合いあいの術がある。がなによ

り、そのステッキは達之助の分身のようなものだった。

外出の時、ステッキを手にしていない父を武馬は見たことがない。腕の力を自慢にし、絶えずその鍛練に重い黒檀の杖を片掌で自在に振り廻しながら歩く。

武馬が幼な心に父に畏敬のようなものを感じることがあったとしたら、それは達之助が黒くたくましいその杖を軽々と飛ばして、目の前をすぎる蜻蛉や蝶を瞬間正確に叩き落して見せるのを目にする時だったかも知れない。

腕力の保持に気を配った達之助は、陸から船へ乗る時健康をこわして船を去る時まで絶対にタラップを使わなかった。必ず船首からロープを揚げさせ、それにぶらさがって手だけを使って十メートルを越す甲板までよじ昇るのだ。

暇な警備員がいると彼はそのタイムを時計で計らせたりした。若い船員でも容易に出来ぬその離れ技は彼がいく何処の港でも名物となった。

減多になかったが船の中の腕力沙汰や、港で船を下りた後の喧嘩は船長の彼が出ると大抵簡単に片がついた。ハンブルグで、酔って無礼な三十貫近いイギリス船員を片掌で引き廻して十メートル近く振り飛ばしたのは、戦前船員仲間では大袈裟でなく国際的に有名な武勇伝でもあった。

同じ体質を受けついでか武馬も力は強い。柄も達之助以上に大きい。しかし、達之助が二度目に体をこわして船を下りた後やっていたパイロットをも引退し完全に陸に上ってしまった二年前までは五十を越した父親に腕力では勝てなかった。

だから達之助は今日になるまで、自分の力について自信がある。大人だてらに自分から腕力を振

うなどということは決してなかったが、何かの折には家族の前でも悠々とその腕をふるい必ず勝った。

例えば達之助には長年の外国航路乗船で得た経験からか、公衆道德に関して徹底した潔癖感がある。婦人、老人、子供の優先、エレベーターの中での脱帽、禁煙等と、悠子や武馬には勿論、見知らぬ人間に誰彼なく注意を与え、きかないと力づくでもそれをさせてしまう。悠子も武馬も、昔はその度に身を小さくしたが、今ではそれに馴れて黙って眼をつむるだけだ。

映画館や車内で達之助から注意を受けた与太者やチンピラが、年輩と見て逆におどして来ると、達之助は逆に誘うようににこにこして見せ、図に乗る相手をいきなり叩きのめした。

流石、二度目の病氣以来、自ら粛して、或いは幸いそうした機会がなくなつて、武馬はそうしたことを見ることなしに来ている。若い頃の無理がそろそろ出てか、達之助は医者から心臓の注意を受けていた。

武馬の東大の入学式の参観に神戸から昨夜上京して来、疲れたとは言いながら達之助は上機嫌だった。相変らず例のステッキだけはかかえながら、半ば閉じた眼を時々見開いては満足そうに周りを見る。

えてしてこんな機嫌の時、達之助はなにかことを起した。武馬はふとそう思ったが、場合が場合だけに別の胸で安心はしていた。

大森で人が混んだ。孫らしい女の子を連れた老人のために武馬は席をゆずった。父親のお蔭でつ

いた習慣である。達之助は当り前な顔をしてそれを見ている。

と、前の扉から入って電車の半ばに進んで来た別の老人を見ると彼も立ち上ってその老人を案内して坐らせる。

彼ら親子の行為に坐っていた他の連中が照れくさそうだった。達之助は知らん顔をして外を見ている。二人にならってか斜め後の席から背広を着た青年が立って誰かに席を譲っていた。

大井町でまた車が混み合った。

二人は押されて中側に入った。また老人が乗って来た。先刻二人が席を譲った以上の年輩だ。夫婦して田舎から出て来たらしい様子が恰好から知れる。年寄り夫婦は混雑と揺れる電車におびえたように身を支える場所を捜そうとするが、かがんだ腰に吊り皮に手がとどかない。

走り始めた電車がレールのつぎ目でか、大きく揺れた拍子に老婆はよろけて前にすわった若い男の膝に手をついた。男は露骨に顔をしかめ舌打ちをする。老婆は恐縮して丁寧に詫言を言った。男はただそっぽを向き隣に坐った仲間へ何か話しかける。その前に立った二人と、四人一緒の連れに見える。

その内、今度は片方の老人がよろけて下駄で男の一人の靴を踏んだ。

男は声を出して老人を睨みつけた。

「ちえ、なにしてやがんだ」

先刻の男が言った。

武馬は予感で父を見返った。達之助は黙って彼を押しつけ側の男の前に立った。武馬は久し振りに眼をつむった。

「君ら、立ちたまえ」

達之助は言った。

坐っていた男は咎めるような眼で見返し、横に立った二人は囲むように向き直った。

「馴れない年寄りが困っているんだ。立ちたまえ」

立っていた二人が鼻で笑った。坐った二人が肩をすくめ、その片方が、

「勝手じゃねえか、俺だっけかったるいよ」

「いいから立ちたまえ」

達之助がくり返した。

「ちえ、あんたが自分で立つのあ勝手だよ」

周りの人の眼がみんな集っていた。

「美談ぶるなよ。あんたが立ったのあ立派だろうがね、何も人におしつけるこたあるめえ」

瞬間、達之助の右手が左右に動いたかと思うと二人の頬が鳴った。

「な、なにしやがる」

思わず立った二人をぐいと両方に分けると、

「どうぞ、ここへおかけなさい」

振り返って言う。老人夫婦はおびえたように達之助を仰いだ。達之助は促すように笑った。有無



を言わせないものがあつた。老婆がおじぎして坐りかけた時、

「なに言つてやがる」

片方が意地になつて坐つた。と見る間片掌で襟をつかんで引き立てられる。

「どうぞ」

達之助は押しやるようにして二人を坐らせた。

男たちに振り返ると、

「良いことをして、良い気持だろう。どうかね」

四人は毒気を抜かれて突つたままだった。

四人が顔を見合させた。

「殴ることあねえだろう」

「殴るさ」

「なにい」

「それが一番早い」

達之助は笑うと横を向いた。

電車は浜松町に入りかかった。

「おい、小父さん一寸顔かしてくれ」

「馬鹿にするな、このままですむと思うのか」

達之助はただ彼らに笑い返した。